

かゑらしと かねて思へハ 梓弓

なき数に入る 名をぞとどむる

四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第137号

令和3年11月9日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

10/12 公開講座「楠正行の生涯を学ぶ」第2回

正行が登場しない第1期戦乱の時代

＝ 軍忠状から見えてくる足利との戦い ＝

● 「七生滅敵」の心とは ●

今月は公開講座「楠正行の生涯を学ぶ」第2回、「第1期戦乱の時代～正行11歳～13歳」です。

講座の冒頭、楠公精神を知るうえで欠くことのできない基本的な知識として、皇学館大学松浦光修教授の提唱される「七生滅敵の心」について紹介しました。

太平記巻16「正成兄弟討ち死にのこの件」では、“正成座上に居つつ、舎弟の正季に向かって、「そもそも最後の一念によって、善悪の生を引くといえり。九界の間に何か御辺の願ひなる」と問いければ、正季からからとうち笑うて、「七生までただ同じ人間に生まれて、朝敵を滅ぼさやとこそ存じ候へ」と申しければ、正成よに嬉しげなる気色にて、「**罪業深き悪念**なれども、われもかように思ふなり。いざさらば同じく生を替へてこの本懐を達せん」と契つて、兄弟ともに刺し違へて、同じ枕に臥しにけり。”と記されています。

松浦教授は、正季が「からからと笑い」、正成が「よに嬉しげなる気色にて」やりとりが行われたのかを理解できなければ、楠公精神の心は分らないと、以下述べておられます。(写真:2枚とも会場の様子)



当時の仏教による宗教的な救いは、迷いの世界＝六道の世界（地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人間・天上）を解脱して、この輪廻の輪を脱し、声聞・縁覚・菩薩という救いの世界＝極楽往生へ行けるというものでしたが、正

成・正季はこの「宗教的な救い」を拒否し、当時としては罪業深い悪念となるが、再び人間界に戻って朝敵を滅ぼしたいと言ったのです。

いわゆる「七生滅敵」の心ですが、二人には「今回の人生ではよくやった」「次の人生でもしっかり戦おう」との武者震いのような気分を、「カラカラ」と笑い、「よに嬉しそうに」語ったのです。

なお、七生滅敵という言葉は、江戸時代「七生殺賊」と変わり、明治になって「七生報国」に変わったもので、同教授によると海軍中佐・広瀬武夫の漢詩が始まりとのこと。

次に、「正成が首、故郷へ送る事」の件に関して、太平記と太平記秘伝理尽鈔の考え方の相違について確認しました。

太平記は、尊氏のこの振る舞いを「情けのほどこそありがたけれ」と称賛し、正成の首級を見た久子、正行は「悲しみの心胸に満ちて、嘆きの涙せきあへず」と変わり果てた父の姿に狼狽する表現となっています。

一方、太平記秘伝理尽鈔は、直義が正成の首を河内へ送り戦意を削ごうとしますが、逆に楠老中は正成の首を

家臣に見せ結束を固め、戦意を高揚し、“正成のはかりごとを正成家臣に用いた直義の愚かさ”と断じています。

また、この時期最大のトピックスともいえる北畠親房の東航作戦と、北畠親房の2大執筆「神皇正統記」と「関城書」を繙き、楠正行の悲劇を生んだともいえる親房の武家蔑視公家優越思想を確認しました。

親房の武家蔑視思想は確信犯で、結城親朝に宛て送ったとされる約70通の書状（関城書）も、吉野朝方有力武将の中にあつて部門誉れ高い奥州の結城一族を率いる結城親朝に対して、あるいはなだめ、あるいはさとし、親房なりにへりくだってあらゆる手法を講じましたが、親朝の心は動かず、助力を得ることはできませんでした。

結城親朝に送った手紙の一部は、以下のようなものです。

「あなたの父は元弘以来、つねに、足利をいただくべからず、弓矢の名誉を落とすべからずといっておられた。その遺言は、あなたも定め忘れてはいないでしょう」

「事の道理として尊氏は、天命を保つべきではありません。吉野の新主（後村上天皇）が一統の御運を問われることは、何の疑いもありません」

「昨年から度々出兵を促しているが、もうこれ以上懇請することはできません。むざむざ運命に任せ、時節を待つ老人の辛苦をお察し願いたい」

しかし、関城が落ち、命からがら吉野に入った親房は吉野朝廷のトップに君臨し、主戦論者の急先鋒として、和陸論に立つ楠正行との確執を深めることになるのです。

● 軍忠状に登場する楠一党 ●

第1期戦乱の時代と銘打った延元元年（1336）6月から延元3年（1338）の末までの約2年半の間、正行は史料に全く登場しませんが、和田文書を中心に正行配下の武将の多くの軍忠状が残っています。

軍忠状によると、前半は、河内東条の近辺、南部戦線（河内天野の合戦）で岸和田治氏らの活躍ぶり、後半は、丹下城・八尾城等の北部戦線（河内の国の合戦）での高木遠盛らの活躍ぶりが分かります。

今まで、ほとんど語られることのなかった湊川の戦直後の状況が、軍忠状から見え、楠一党の奮戦ぶりがはっきりと分かります。

軍忠状の事績を年表に落とし込むことで見えてきた楠軍の戦いぶりですが、第1期戦乱の時代、前半は岸和田一党、そして後半は高木一党の活躍によって足利軍を押し返しますが、延元3年に入り、奥州から西上した北畠顕家が合流、5月、石津浜の戦いで戦死します。楠の支援が遅れたため顕家が戦死したと、親房は遺恨を持つことになり、結果、この遺恨が正行を死地においやる一因になったとの説もあります。

しかし、この時代は、親房の東航作戦、そして義良親王の吉野入りで幕を閉じました。

以下、第1期戦乱の時代に正行を支えた主な武将は以下の通り。

<北軍>

◇守護代大塚掃部助惟正／36／和泉守護代／・河内国石川郡（河南町）・正行側近中の側近で、南軍（和泉軍）総大将。・四條畷の合戦で討ち死・延元元年11月18日、和田氏に吉野総門大番役の勤司を命令。・延元2年1月1日、平石、八木らを伴い和泉に出陣、足利と攻防始まる。・延元2年3月2日、治氏と古市に城を築く。・延元2年3月10日、治氏、平石、八木や細川顯氏と古市合戦。

◇八木弥太郎入道法達／和泉目代／・和泉国南郡八木郷（岸和田市）を本領とする国御家人・和泉の管領大塔宮、近臣四条隆貞の家人と思われる

◇神宮寺新判官正房／・河内国石川郡（千早赤阪村）・河内国高安郡神宮寺（八尾市）が本貫とも。・太平記では、神宮寺の太郎兵衛正師の名で登場。・楠氏八臣にも数えられる。

◇岸和田弥五郎治氏／和泉国人／・岸の和田から岸和田になったとの説も・治氏、快智、定智は親子か、兄弟か不明・大塚正連に近侍・延元元年6月19日、京都攻防戦に参戦。・延元元年8月1日、大塔宮を奉じ八幡に参戦。・快智、定智と横山に赴き敵の館を焼く。神宮寺正房、八木法達とともに湊川の戦に参戦した軍忠状残る。天野合戦の多数軍忠状残る。

◇岸和田侍従房快智／和泉国人／・治氏の一族・延元2年5月14日、定智、治氏と武家軍を天王寺に攻める。

◇岸和田大輔房定智／和泉国人／・治氏の一族・延元2年6月、快智、治氏と宮里城を波状攻撃。天野合戦の多数軍忠状残る。

<南軍>

◇橋本九郎左衛門尉正茂／34／河内守護代／・和泉の国日根野橋本を本貫とする。・四條畷の合戦では、正義護り役として河内東条に残る。・北軍（河内軍）総大将。正行の重臣。・延元元年9月、畠山国清と攻防・高木遠盛、和田正興と河内松原城を攻める。

◇高木八郎兵衛尉遠盛／河内国人／・正茂の配下。・北軍の中心武将。軍忠が抜きんでている。・延元2年7月4日、小山忠能の加勢を得て八尾城攻撃。・延元2年8月16日、五条河原で戦う。・延元3年5月22日、河内高安で攻防。・延元3年6月、河内曲松、洞ヶ峠等、各地で合戦。河内合戦の立役者。多数の軍忠状残る。

◇小山三郎左衛門尉忠能／紀伊

◇和田佐兵衛尉正興／・橋本正茂配下。・高木遠盛と丹下城を攻める。・高木遠盛と池尻・野田城の敵を駆逐する。

◇和田正武／30／・正興の弟。堺浦、城岸寺城の城主。・延元3年8月9日、尊氏が吉野を襲うとの報あり、吉野を警護する。

◇佐備三郎左衛門尉正忠／・河内国石川郡（富田林市）・延元3年9月29日、高木遠盛と池尻で戦う。

（文責『四條畷楠正行の会』代表 扇谷昭）